
異国陰陽伝 - アメリカ編 -

風斬黎歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異国陰陽伝 - アメリカ編 -

【Nコード】

N3098Z

【作者名】

風斬黎歌

【あらすじ】

日本史において、平安時代に土御門家とともに陰陽大家として君臨した、双樹院家は、現代の日本ではその血は絶えたと考えられていた。

しかし、双樹院の血は、今も、アメリカ合衆国コロラド州で、一人の女子高生が繋いでいたのである。

女子高生の名は、マカ・サジュ・アステル。日本名は双樹院紗夜。双樹院の血を繋ぐ天才陰陽師である彼女は、虹蛇とともにアメリカ

大陸の守護を担う「水ノ乙女」の守人となった。

ブログ（前書き）

完結した小説を投稿することにしました。

私^がはじめて書いた小説です。どうぞ読んでいってください

ブローグ

サッカーボールが転がっていった。

ボールが飛んでいった先は、大金持ちが住んでいそうな屋敷であった。入口は、鉄製の門に、鍵がかかっており、人が入ることができなかった。

―大人ならば。

彼は、小柄な体を生かして、門の鉄柵の間から入り込み、サッカーボールを捜しに行った。人の家に勝手に入ってはならないという常識は、彼の脳内には存在しなかった。

洋館の周囲は見事な庭園だったが、庭師も警備員もいなかった。本当に人が住んでいるのかと思うぐらい静かだった。昼休みで昼食をとりに行ったのだろうか？ともかく、ボール探しには都合がよかった。

サッカーボールはすぐに見つかった。彼がサッカーボールを抱えて、大人に見つからないうちにさっさと帰ろうとすると、女の子の声が出た。

「どうやって入ってきたの？」

彼がハッとして振り向くと、表の洋館の玄関ドアが開いて、女の子が顔を覗かせていた。女の子は左目に眼帯をしている。金髪の髪を、真横で二つ、括っていた。

彼が答えられずにいると、女の子はなおも質問した。

「お外から来たのね？」

「うん」

彼が頷くと、彼女は嬉々とした様子で外へ出てきた。彼より少し年上のような感じだった。

「ねえ、ここの人たちが帰ってくるまでまだ二時間あるわ。外の話聞かせてよ」

どうしてそんなことを聞きたがるのだろうという疑問を彼は抱く。けれども、彼はその疑問を口にしなかった。何だか、その質問をしてはいけないような気がしたからだ。

「いいよ。こっちにおいでよ」

女の子はタッタタツと走ってきて、彼が立っている芝生のところまで来た。彼よりずっと身長が大きかった。頭二つ分ぐらいの差だ。

彼がペチャクチャと喋っている間、女の子は時々、腕時計を見ている以外は熱心に彼の話に聞き入っていた。時の流れも忘れて、彼は話し続けた。

「もう、時間だよ」

彼は、女の子の一言で初めて、時間が一時間以上過ぎてしまったことに気がついた。

「君は、外に出たことがないの？」

彼の質問に女の子の表情が翳った。

「…私は、お兄さんから、外に出ちゃダメって言われてるの」

彼女はそう言って立ち上がった。

「待ってよ、君の名前は？」

「私？私の名は…エディタよ」

女の子は泣き出しそうな顔で答えた。そして、彼の両肩を掴んで言った。

「お願い、ここを出たら、私のことを他の人には絶対言わないで！お願いだから…約束してくれる？」

女の子の表情は真剣だった。その気迫に気圧されるような感じで、彼は言わないと誓った。

屋敷の外に出て、彼は後ろを振り向いた。しかし、もう屋敷の玄

関前には誰もいなかった。

翌日――

彼はもう一度そこに行ってみた。だが、昨日と同じ時刻に行ったのに、彼は警備員に見つかってしまい、つまみ出されてしまった。

序章 水ノ乙女

彼女らに用意された道は三つ

望まない相手に身を任せて処女を喪失する。

人ではないものに襲われて身を肉片に変える。

守人を信頼して、命を預ける。

第一話 マカ

好奇の視線が突き刺さる。

（東洋人って、そんなに珍しいのかな）

アメリカは、多民族国家ではなかったのか。四年課程の高校に進学してから、警察に呼び止められて職務質問されるようになったし、パスポートを見せろと言われて、自分は旅行者じゃないと言ったこともある。

彼女の名はマカ・サジュ・アステル。又の名を双樹院紗夜。一族はアメリカでの名と、日本名をもっており、一族にとっては日本名が本名だ。

双樹院の名は、一族がアメリカに移り住んだときから受け継がれている。

双樹院一族がこのコロラド州の州都にやってきた時、他のアメリカの州と同様、州都デンバーは奇怪な妖怪の出没がもう当たり前になっており、州民の安全のために、コロラド州の霊的守護者が必要だった。

双樹院一族は、移民として移り住む前は、平安時代に安部家とともに活躍した陰陽師大家のひとつであり、古の戦闘術を受け継いできた為、自ら報酬と引き換えにコロラド州の霊的守護をかってでた。そして、街をさ迷う妖に対して陰陽師としての力を発揮した。

戦時中は、それまでに多くのコロラド州民が、双樹院に救われてきたため、日本人だからと蔑まれることもなく、デンバーの郊外の屋敷に住み続けることができた。

デンバー郊外日本人町の屋敷を本拠地として、一族は知事から託されたコロラド州霊的守護を現在まで続けている。

一族同士で血をつないできたため、マカは生粋の日本人として生まれてきたのだ。

マカは去年までは、日本人町にある日本人学校に通っていたが、中学を卒業してからは、親の決断で、日本人町からそう遠くない、ラズライト・パブリックスクールに進学した。去年までは、屋敷と学校は目と鼻の先にあったのだが、通学時間が一分でも増えてしまふのが、マカにとっては気にいらなかった。

（面倒だな…）

入学式が行われているというのに、マカは堂々と居眠りをはじめた。

イザベル・ユンランは、入学してすぐに女友達を見つけていた。ユイリンとリサと一緒に、食堂で仲良く食事していた時、イザベルは自分達のテーブルのすぐ隣で黙々と食事している性別不明の人に気がついた。

「ねえ、あの子って…女の子だよな？」

「え？あゝ…わかんない…性別不明だわ。男の子に見える…」

「最初はすごくクールな男の子だと思ったんだけど…」

三人で騒いでいるうちに、噂されている本人は食事を済ませ、さつさとテーブルを離れて行ってしまった。

「あーあ、行っちゃった…話しかけようと思ったんだけどなあ」

「なあに、イザベル。あの子が気になるの？」と、リサがニヤツと笑って言った。

「まさか。大体、性別が分からないじゃない」

十日後、九月十日に、イザベルの十六回目の誕生日が巡ってきた。学校の終わりに、イザベルと、ユイリン、リサが属している男女混合グループが、グループの一人の家でホームパーティーをすることになった。そのあとは友人がとあるレストランを借り切って、誕生日を祝ってくれるという。イザベルは最初は遠慮したが、友人があまりにしつこく勧めてくるので、思い切ってその提案を受け入れることにした。

十日後、同日、午後7時…

マカは家を目指してのんびり歩いていた。この前も、この時間帯まで家に帰らなかったことがある。

横断歩道を横切り、ナンパ男が女達をナンパしているのを横目で見ながら、マカは住宅地に入った。その先に、彼女が住まう日本人町がある。

「もうすぐだ。お腹がすいたなあ…」

しかし、マカの意識はすぐに現実に戻された。

マカは足を止めて、ひとつのレストランの前に立った。彼女の唇が左右にひかれる。時々帰りが遅くなるのは、学校の用事だけではないのだ。

「やったな…」

住宅の中で暴れ狂うものを感じて、マカは顔をしかめた。その家は静まり返っている。濃い妖気がそのレストランから流れ出ている。

レストランの店内。ゴトン、と音がして、

「…あれ」

イザベルは目を覚ました。

気がつくと、部屋は真っ暗だった。カーテンの隙間から、わずかな月光がさしこんでいる。

「ユイリン…？リサ…？」

体が鉛のように重く、動かすのが大変だった。側には、紅茶が入っていたはずのカップが転がっている。

そして、部屋の中には、イザベル以外にも、倒れている人がいた。真っ暗な部屋に、ビールやジュースの瓶が転がり、潰れた空き缶がテーブルの上に置かれていた。

皆も自分も、酔っ払ってしまったのだろうか。酒を飲んだ記憶は

なかったのだが…

イザベルはとりあえず、意識をはつきりさせようと頭をぶんぶん振った。そのとき、階下から悲鳴が聞こえた。

「いやあっ！」

悲鳴はユイリンのものだった。こんなに大きな悲鳴が響いているにも関わらず、床や椅子で眠っている彼らは全く目を覚まさない。

「ユイリン…！」

イザベルは急いで一階に降りて、悲鳴が聞こえてくるキッチンの方に向かった。そして、キッチンに入ると…

「何やってるの!？」

イザベルはユイリンに覆いかぶさっている男を急いで引き剥がそうとしたが、ものすごい力で突き飛ばされて壁にぶつかった。男は、ユイリンの首を締め上げていた。イザベルはなおも引き離そうとするが、同じことが繰り返されるだけ。

このままではユイリンは死んでしまう。

そのとき…

「きやあっ！」

キッチンの窓ガラスが割れて、何者かが飛び込んできた。そして、その何者かが男を蹴っ飛ばして、今度は男が天井に激突した。男は低く呻いて、第三者を見た。男は、もはや人間とは思われない顔をしており、体が灰色に変化していた。

男の注意が第三者にいつている隙に、イザベルは急いで、解放されたユイリンの側に駆け寄った。

「ユイリン!? 大丈夫!？」

「イ、ザ…ゲホッ」

「しゃべっちゃだめ！」

ユイリンは虚ろな目で、イザベルは怯えた目で、男と、第三者を見た。突如男の背中を人間とは思われない脚力で蹴飛ばしたのは、あの時テーブルで食事していた生徒だった。

飛びかかろうとした化け物を、マカは自動拳銃で撃ちぬいた。

それはただの拳銃ではなく、式神である。術者の精神力と霊力が弾丸に成るため、弾切れの心配はないが、精神力がない者には使えない。

そして、その自動拳銃で体に十発もの術者の精神がこもった弾をくらえば、それはもう術者の人形と同じである。

『爆発しろ』

と、マカが化け物に命じたら、化け物はそのまま爆発してしまった。後に残るのは、男のおびただしい血液の跡。呆然としているイザベルとユイリンに慰めの言葉を何一つかけることなく、マカは「…そんじゃ、私帰るね」と言っ、彼女は片手をあげた。すると、マカの後の空間が歪み、大きな穴が開いた。穴の向こうには蒼い空間が広がっている。

「じゃ後始末よろしく」

「ちょ、ちよつと待って！」と、イザベルは帰ろうとするマカの足を掴んだ。

「お、お願い、私と、ユイリンも連れてって！」

「……別にいいけど…連れの人たち怒るんじゃないの？」

「それは大丈夫よ」と、ユイリンが言った。

「だって、私達たくさんお酒を飲まされたもの。何が起きたかなんて覚えてないから、作り話をしても…あの人たちは…信じるわ」「ふうん。ならいいけど」

そうして、マカは客を自分の家に連れて帰ることになった。

どこまでも蒼い空間の中。

「あの…」

「何」

「名前は、なんていうの？」

「マカ。マカ・サジュ・アステル。一応言っておくけど、女の子だからね」

「!!」

「これは…一体？」

「これは…魔術。私は異空間と、現実空間をつなげて移動できると、彼女は面倒くさそうに答えた。

彼女達がいるのは、どこまでも蒼い空間で、その中にただひとつ、真っ白な道が先の見えない向こうに伸びている。

「白い道以外歩かないようにね。どんなところに飛ばされるかわからないから。もしかしたらアフリカのサバンナに飛ばされるかも」と、マカは二人にくぎをさした。ユイリンが、好奇心から、歩く方向を道から外そうとしていたのを確かに彼女は見届けていた。

マカは目を閉じて、自分が行きたい場所を念じる。すると…

「イザベル、見て！」

青い空間が、まるで霧のように霧散して、その後からは見知らぬ部屋が視えてくるではないか。

「私の部屋へようこそ」

微笑んでいるマカの後ろに、教科書や写真でしか見たことがない、日本家屋の部屋が広がっていた。

「こんなの…もはや、魔法じゃない？」と、ユイリンはイザベルに話しかけた。イザベルが答えようとしたが、「靴は脱いで！」とマカにぴしゃりと言われて、二人は慌てて靴を脱いだ。マカに差し出された新聞紙の上に、靴をおく。

「だって、そんなので歩き回ったら困るし、私が叱られるし」と、マカは困惑するユイリンとイザベルに向かって言った。

第二話 見慣れない家

イザベルは今一度マカの部屋を見回した。

板張りの床の上に、彼女らは立っていた。壁にそつて、ぬいぐるみも何もないベッドが置かれている。反対側には、店で売られていそうな学習机がある。学習機の隣には、本がぎっしり詰め込まれた本棚がある。本棚の丈は低く、机の高さと同じくらいだ。机もベッドも、木材の特徴をそのまま残していた。

アメリカでは普通、女の子の部屋に置いてあつて当然のドレッサーがない。化粧道具すら置いていない。というより、部屋に女の子らしさの欠片もない。衣装ダンスと思われるようなものもなく、無骨な箆笥を開けてみると、私服と和服が一緒に折りたたまれて入っているだけ。しかも私服よりも「着物」の方が多い。

「マカつて、お化粧はどこですの？」

「面倒だからしない」

「えゝっ！だからすつぴんなの？」

「職業柄、化粧は邪魔なの。シャワー浴びたいだろうから、風呂場案内するよ。さっきあいつを殺した時に、返り血ついたでしょう」
本当にそのとおりだった。二人とも、服に大量の血痕がついていた。マカも二人と同じ状態だったが、全く気にしていない。マカはイザベルとユイリンを風呂場へ連れて行き、脱衣室にマカの服を置いて、（お下がりならたくさんあったため）父親がいる居間へ向かった。

『お父さん、ただいま』と、マカは父親に日本語で話しかけた。家族と会話する時はいつも日本語だった。

『お帰り、紗夜。またシャワーを浴びずに来たね』

『父さん、実は…』

『いや、言わなくていい』と、父は右手をあげて言った。

『伊達に当主をやっているわけじゃない。デンバーで起きていることはここにいても大体わかる。今日はその人達を泊めてあげなさい』

『なら、今日のことは言わなくていいよね』

『うん。お前は優秀だなあ…お前が十六歳になり、夜の「掃除」に加わるようになってから、人間の犠牲者はかなり減っている。しかし…見つからなかったらうね』

『もちろん。…でも、お父さん』

『なんだい』

『ソファアの上で着物をだらしなくして寝転がってテレビをみているオヤジに、式神は似合わないんだけど』

『いやあ、ひどいなあ。僕だって、今日の前で妖魔の返り血をぐっしょり被っている子が自分の娘だなんて考えられないね』

双樹院家二十七代目当主というのが彼の肩書きであり、双樹院秋二というのが彼の日本名で、ここを通っている名前は、リチャード・サジュ・アステル。手練だが、今はソファアでだらだらしていた。双樹院家の実力と霊力がものを言って、コロラド州では特別に、戸籍に二つの名を登録することが認められているため、マカにもリチャードにも、マカの母にも、一族には全員、二つ名前があるのだった。

『母さんがご飯つくってるからね』

『ラジャ』

風呂からあがってきた二人は、入れ替わりに風呂に入っているというとするマカを聞きたいことがたくさんあるといった視線で、じっと見た。

「はいはい、何か聞きたいのね？いいよ、質問に答えましょう」

「まず…そうね、あなたは何者なの？」

「…（陰陽師って、英語でどう表現するんだろう）…ホーンテッドハンターとだけ言っておこうかな。これ…どう表現していいかわからないし。あなた達も見たでしょう、あの男、人間じゃなかったでしょう？」

二人は頷くしかない。信じられないが、真実は目が覚えていた。

「バックベアードとか、吸血鬼とか、信じられないだろうけど、いるのよ。そういうのは。あ、ちょうどいいから警告しておくけど、君達、山には絶対入っちゃだめ。境界を越えたら、山は無法地帯だから、人間を餌食にする輩がうようよいる」

「！」

「なんでそれを野放しにするの？」

「…ユイリン。あなたは、妖怪が全部いなくなったらいいと思う？」

「思うわ！」

「妖怪は、消えない。この世に闇が全くない幸せな国など存在しない。妖が生まれるもとなる負の感情は、底辺で泡のように生まれ続ける。恨みが頂点に達した時、一匹の妖が生まれるのよ。」

一番恐ろしいのは、妖なんかじゃない。私達、人間なの」

ユイリンは、金槌で殴られたような顔をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3098z/>

異国陰陽伝 - アメリカ編 -

2011年12月10日22時48分発行